

スワルスキーカブリダニの簡易温存方法の検討

○眞壁敏明・勝間田やよい・中村拓耶

神奈川県農業技術センター足柄地区事務所（普及指導課）

後期加温型ハウスマカンのミカンハダニ、施設バラのアザミウマ類を対象に、スワルスキーカブリダニ（以後スワル）の利用を検討した。問題点として適期放飼の困難さがあり、原因として次の2つが挙げられる。対象害虫発生初期確認後、製品の発注から到着までの1~2週間で放飼適期を逃し害虫が多発する。また、対象害虫未発生時期では作物に定着せず、以後発生する害虫に対する抑制効果がみられない。ここでは、現地でのスワル適期放飼を目的に、害虫未発生時に製品を入手し1ヶ月を目安に温存する簡易な方法を検討した。

培地の粗密とスワル、サトウダニ（製品に入っている餌ダニ）の密度との関係を、ふすま+三温糖+ビール酵母を培地とする既存の手法を基に、ふすま・粳の混合割合（密（ふすま：粳(v/v) = 10 : 0）、中（ふすま：粳 = 7 : 3）、粗（ふすま：粳 = 0 : 10））の違いにより調べた。個体数は、卵を除く若虫及び成虫を計数した。別容器で飼育したサトウダニをスワル飼育容器に給餌した場合、サトウダニ数は密 > 中 > 粗、スワル数は密 < 中 > 粗となったことから、サトウダニの最適培地 ≠ スワルの最適培地であることが分かった。

そこで、容器をダンボール板で（ふすま：粳 = 10 : 0）と（ふすま：粳 = 0 : 10）を仕切ること、サトウダニ温存場所とスワル温存場所を同一容器内に設置した（図）。サトウダニを別容器から給餌せず、培地を添加するのみとした。サトウダニの供給は同一容器内のサトウダニ温存場所のみに依ったところ、スワル温存場所とした培地（ふすま：粳 = 0 : 10）のスワル密度は製品の15~70%に低下したが、製品頭数を1ヶ月以上維持することができた。

以上の結果、本方法の現地実施をハウスマカン農家3名、施設バラ農家1名の資材庫でおこなったところ、スワルを適切に温存することができた。



（図）スワルスキーカブリダニ温存用容器と培地とした粳、ふすまの設置状況
外容器内は水を張り、内容器外周は吸水紙を巻き付けた。

A simple technique for saving and rearing of *Amblyseius swirskii*.

Toshiaki Makabe・Yayoi Katumata・Takuya Nakamura

Kanagawa Agricultural Technology Center Ashigara Regional Office (Extension and Guidance Section)